(2) 太田　良平（おおた　りょうへい）（1913～1997）

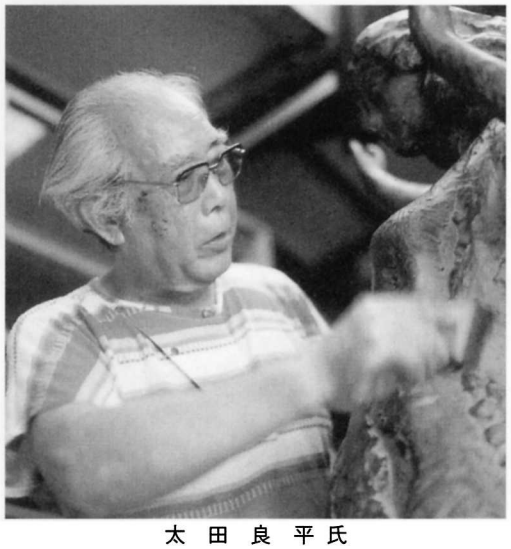
大正２年（1913年）７月、建築家の長男として、梁川町に生まれました。小さいころは、近くのお寺にある「山岡鉄舟」の書に感動し、書家になることを夢見ていました。しかし、小学校高等科のとき、日本画家の新聞記事を見て、影響され、自分もいつか帝展（日本で一番大きな芸術のコンクール）に出してみたいと思うようになりました。

そのころから、ひそかに彫刻家になろうと決めていました。

昭和６年、16才の時、「帝展の審査員になろう。」と上京し、郡山出身の三木宗策の塾へはいりました。

その後、勉強を一生懸命に勉強した良平は、昭和10年（1935年）「浴後」という作品で初めて帝展で入選しました。

昭和12年、良平は歌人の高村光子と出会い結婚して、三木塾から独立して新しい生活をスタートさせ、いろいろな展覧会に続けて入選し、良平の将来は大いに期待されました。



太　田　良　平　氏

太平洋戦争がはげしくなり、昭和20年（1945年）、妻と子どもたちと故郷の梁川町へ疎開しました。東京で作った作品のほとんどは戦争のために消えてしまったのです。戦争の終わった昭和22年、福島県では初めての美術展が開かれました。その時は彫塑部門（彫刻の部門）がなかったため、翌年、荷車で自分の作品を持ち込み、福島県の美術界の発展のために力をつくしました。

その後は、梁川町や福島市で若い芸術家たちの指導にあたり、現在の福島県彫刻界のもとをつくりました。昭和23年には北村西望の門下生となり、日展に８回、帝展に６回入選し、日本彫刻界にその名を広めました。

そのころ、良平は、制作活動で悩んでいましたが、福島市にあるノートルダム修道院の修道女の美しい姿に心を動かされ、その姿を作品にしました。そして、修道女の作品をたくさん作り、様々な賞をもらいました。

風の修道女　　1973年
（太田良平記念ホール）

昭和35年、若いころからの夢だった日展の審査員になりました。